嵐舞姫

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嵐舞姫

【Ｎコード】
Ｎ７９６６Ａ

【作者名】
春秋

【あらすじ】
少女は今日も旅をする。諦めることを知らずに。歩む先に波乱が待ち受けることも知らず。

予言（前書き）

かなりのんびり更新ですが、気に入って下さると嬉しいです。

予言

十二月神を従え、闇にも光にも染まらずに世界を旅する者。
かの者の
歩む道は、比類なき程波乱に満ちた道。
されど、かの者、
全てを魅了し、巻き込み、新たな道を創り、指し示す。
か
の者は、人であるがゆえの強さを秘めし者。

出会い（前書き）

久しぶりの更新です。スローペースですが、読んで頂けると嬉しいです。

出会い

「ねぇ、この辺りに泊まれるとこ、ある？」
タナサに話し掛けたのは2、3歳年下に見える少女。
日に透ける綺麗な髪は今まで見たことのない紫黒。
強い光を宿し、自信に満ちた瞳は晴れわたった空のようにどこまでも深く澄んだ紺碧。
上等な布で作られたこの辺りでは見掛けない砂色のフードが全身を被っている。
「どうしたの？あっ、怪我痛いの？気付かなくてごめんね」
少女はフードの中をごそごそと探る。取り出した手に握られていたのは、緑色の細長い紙。
紙には、様々な色を用いて不思議な紋様が描かれていた。
「ところで、名前は何？私は璃空（リク）よ」
あなたは？と問いかけるように少女は首を傾げた。
周りの状況を理解していないのか、慌てた様子を見せない少女をタナサは信じられないように見た。
なぜなら、少女の後ろでも横でも、何匹もの醜い妖鬼が唸り声を上げているのだ。
人を餌とする邪悪な妖鬼が、その大きな目をぎらぎらと光らせ、大きく裂けた口からダラダラと涎をたらし、舌なめずりをしながら。

タナサは、森に野草を取りに来て妖鬼に襲われた。
妖鬼に襲われれば、普通の人間は食べられてしまうだけだ。妖鬼に対抗出来る者はごく僅かしかいない。

倒妖士。
そう呼ばれる者だけが辛うじて妖鬼から人を守ることが出来る。
倒妖士に憧れ、目指す者は数多く存在する。だが、倒妖士になるこ

とが出来る者は、ほんの一握りに過ぎない。
妖鬼に襲われ、命を絶たれる者も数多い。
また、倒妖士に成れた者でも、妖鬼を倒すだけの力を手にするまでに時間がかかる上に闘いで命を落とす者も少なくない。
さらに、倒妖士として活躍出来る期間は短い。十年活躍出来れば長い方となる。
ゆえに、倒妖士の総数は少ない。妖鬼に脅える人々を全て助けることが出来ない程に。
妖鬼が居ると分かっていても、倒妖士に退治を依頼するのは簡単ではない。
倒妖士を呼ぶのに掛かる金は、裕福な所でなければ難しい。
一般の人々に出来るのは、出来うる限り注意を払い危険を犯さないようにし、祈ることぐらいしかない。

だから、タナサも十分に注意してはいた。
それでも、気が付けば周りはすっかり妖鬼に囲まれていた。
せいぜいタナサの膝辺りまでしかない、小さい妖鬼だが力も強く簡単な魔法すら使いこなせる彼らから逃げ出すことは出来なかった。
それでも、タナサは諦めたくなくて凍りついたように動かない足を必死に動かして、逃げようとはしたのだ。
だが、一瞬で追いつかれ、逃げ出さないように血や垢で汚れた大きく歪な爪がタナサの足を切り裂いた。
ぽたぽたと、血が流れ落ちていく。
血の臭いに興奮したのか、妖鬼たちの唸り声が大きくなる。妖鬼から漂う腐臭も強くなる。
痛みと恐怖に苛まれ、タナサは死を覚悟した。
だが、妖鬼の冷たい牙も爪も、その身に食い込むことはなかった。

恐る恐る目を開けたタナサの目に飛び込んできたのが、璃空だった。
強張って動かない口を必死に動かし、タナサは声を上げた。
「う、後ろ」
璃空の背後には、数頭の鋭い牙を持った妖鬼が口を大きく開け、迫っていた。
「うん？」
ちらっと背後に目をやると璃空はそのまま紙をタナサの足に張り付けた。
迫ってくる妖鬼にタナサは恐怖を隠しきれずに震えた。
足の痛みは意識に昇る余裕もなかった。

出会い（後書き）

さぁ、始まった。世界の鍵を握る者の旅が。

カンナ（前書き）

かなりのんびり更新です。一人でも楽しんで頂ければ嬉しいです。
感想くれると泣いて喜びます。

カンナ

「カンナ」
面倒そうに璃空は一言呟いた。
唐突な言葉にえっとタナサは驚いて璃空の顔を見る。
だが、璃空はタナサの様子を気にすることなく、手を動かしていく。
そのためらいのない動きには、妖鬼に対する恐れの色は一切なかった。
だが、璃空の真後ろでは妖鬼が鋭い牙を光らせ、噛みつこうとしている。
鋭い牙が璃空の細い首に触れる寸前に、妖鬼の首が飛んだ。
「カンナ、遅い。さっさと終らせて。日が暮れるじゃない」
「あぁ？だったら、璃空がすればいいだろうが。俺に頼らずに」
璃空の言葉に呆れたように言葉を紡ぐのは、タナサと同じくらいの少年。
璃空と同様に、突然姿を現した少年は孤高の獣のようだった。
短い銀の髪が舞い、キラキラと艶やかに光り輝く。
呆れたような言葉とは裏腹に楽しげな瞳は獲物を狙い鋭く光る灰銀。
璃空と会話をしながらも僅かな隙も見せず、背丈程の太剣を振るい、舞うように次々と妖鬼を切り捨てて行く。
妖鬼の爪どころか飛び散る赤い血すら、一滴たりとも少年に触れることが出来ない。

少年の戦う様はまるで、血に飢えた獣のように荒々しく、そして身震いするほど美しかった。
魅いられたように、タナサは目を反らすことなく少年の姿を目で追い続けていた。

「終了っと。璃空、そっちは終わったか？」

全ての妖鬼を倒し終わると、物足りなそうな表情をし、一つため息を付くと、璃空を見た。
「終わったわよ。タナサ、立ってみて。足、痛くない？」
カンナの動きにみとれていたタナサはいつの間にか傷の痛みが消えていることに気が付かなかった。
璃空の声に促されるようにタナサは恐る恐る立ち上がった。
あれほどズキズキと痛んだ傷は跡形もなく綺麗に消えていた。
タナサは信じられない思いでそっと傷のあった場所を触った。
本来、妖鬼に付けられた傷はかすり傷であっても痛みが治まり塞がるのに少なくても一ヶ月以上かかる。
しかも、そのほとんどが醜い痕を残す。妖鬼の爪や牙に毒があり、傷に残るからだ。
「…治ってる」
タナサは傷があった場所を何度も触りながら、茫然と呟いた。
「当たり前よ。私が治したんだもの」
普通なら有り得ぬことも少女にとっては普通のことなのだろう。
自慢する様子すら見せなかった。

カンナ（後書き）

少女の常識と世間の常識とのズレは何故？

後始末（前書き）

感想を頂いたおかげで執筆速度が上がりました。
一人でも多くの人に楽しんで頂ければ、幸いです。

後始末

「さてと、カンナ、妖鬼どうにかして。このままじゃ臭くてしょうがないじゃない」
璃空より背の高いカンナに臆することなく、指を突き付ける。
妖鬼の死体は、簡単には消えない。かといって放置しておくと時間が立つにつれ、周囲の物を妖気で蝕み、枯らしてしまう。中には妖気に蝕まれ、妖鬼とかす生き物も少なくない。
そのため、妖鬼を倒した者は、その後始末までが義務付けられている。

「…俺が剣術しか出来ないって知っててそんな事言うか、普通」
「あら、そうだったかしら？」
璃空は可愛らしく首を傾げ、笑ってみせる。
「……俺が悪かったです。どうか妖鬼達を消して下さいませんか、璃空様」

僅かに顔を歪ませながら言ったカンナに璃空は満足げに笑う。
「了解」
う～ん、と少し悩むように璃空は妖鬼達の死体を見回した。
すうっと息を吸い込むと目を閉じ聞いたことのない不思議な響きの歌を詠い出した。
歌に合わせるように死体の周りに青白い炎が現れ、死体を焼き付くした。
「相変わらず、歌は綺麗だな」
感心したようにカンナが手を叩く。
「それは、嫌味？カンナ」
「あっ、あの、ありがとうございます」
深々とタナサは頭を下げた。

「気にしないで。大したことじゃないから。そうだ、１つ尋ねてもいい？」
「もちろんです！私に答えられることだったらなんでも答えます」
勢い込むタナサを呆気に取られたように見たあと、弾けるように璃空とカンナは笑いだした。
「大したことじゃないんだから、そんなに張り切らなくてもいいよ、タナサ。何処かこの近くにいい宿ない？」
くくっと苦しげにしながら、顔を真っ赤にしたタナサに璃空は尋ねる。
「宿ですか？だったら、うちに泊まって下さい！」
う～ん、と軽く首を傾げる。
「いいの？遠慮なくお邪魔するよ」
「はい！」
こくこくと何度も首を縦に振るタナサに、二人は再び込みあげる笑いを押し殺した。
「よろしくお願いします、タナサ」

後始末（後書き）

静かに運命の歯車は回り出す。

精歌（前書き）

投稿の間がかなり空きました。
待ってて下さる方がいれば幸いです。

精歌

「あの、璃空さん」
榛色の瞳に尊敬の光を宿したタナサが少し後ろを歩く璃空を振り返る。
「何、タナサ？それと呼び捨てでいいよ、私も呼び捨てだし。第一、タナサいくつなの？」
タナサよりも頭一つ分は背の低い璃空がタナサを見上げる。
「私は、１７だけど」
「１７？やっぱり私より年上じゃない。私は１４だもの。呼び捨て、決定！さん付けたら、返事しないからね」
あと、カンナも呼び捨てでいいからね。
明るい声につられるようにタナサは頷いた。
よし、と満足げに璃空は笑った。
「それで、用は何？」
数度躊躇ったあと、璃空の笑みに促されるようにタナサは尋ねた。
「あの、あの歌は…？」
「歌？あぁ、精歌（せいか）よ」
「精歌？」
不思議そうに首を傾げるタナサに分かりやすいように説明をしていく。
「精歌は正しくは“精霊に語りかけし為の呪歌”という意味なの」
世界には、光・闇・風・地・火・水・木の７属性の精霊が存在する。
本来、滅多に人と関わりを持とうとしない精霊の力を借りる為に世界にはいくつかの術が存在する。
その内の１つに力を込めた呪歌で精霊を呼び、語りかける方法がある。
しかし、本来人とは異なる言語を扱う精霊と語り合う為には一定の

形が必要となる。その為に創られたのが精歌だ。
精歌の威力と発動までの速さは精霊の力を借りる術の中でも最上位に位置する術といえる。
他の術で精歌と同様の効果を及ぼすには数倍の時間と手間が必要となる。
しかし、その強さの割に世間に精歌の名が広まっていないのは詠える者がごくわずかしかいないからだ。
精歌を詠えるかどうかは、生まれつき定められている属性の強さがある一定のレベル以上であるかどうかで決められる。
そのレベルに達する者が滅多に居ないことと、そのレベルに達していても教えられる者が少ない事が精歌の詠い手が少ない理由となる。

「…のが精歌。まぁ、精霊との共通語だと思えばいいわ。あまり威力はないけど、発動は速いほうかな？大体、こんなとこかな？分かった？」
「はい！精歌って、凄いんですね。それにすごく綺麗でした」
璃空の説明を一言も逃すまいとしていたタナサが聞き終わったあと感慨深げに呟いた。
「そう？ありがとう」
（精歌の説明だから、あれくらいでいいわよね？資格とかの話なんて、自慢以外の何物でもないし。威力は・・・あまりないわよね、・・・歌によるけど）
「どうしました、璃空さ」
急に黙り込んだ璃空に心配そうにタナサが声を掛けた。
「何でもないよ、タナサ。心配してくれてありがとう」
にっこりと輝くような笑みを浮かべる璃空の顔から、僅かに頬を赤くしたタナサが目線をずらした。

精歌（後書き）

精歌を教えたのは誰？

師匠（前書き）

遅くなってすみません。
待っていて下さる方がいると嬉しいです。

師匠

「カ、カンナはどうしたの？」
赤くなったのを誤魔化すようにタナサは辺りを見回した。
「さぁ？カンナは気まぐれなとこがあるから。その内、戻ってくるんじゃない？」
カンナの不在に璃空は全く心配する様子はなかった。
「でも、この辺りは遅くなると盗賊とかが出て来るのに」
会ったばかりの人を心配するタナサの様子にクスッと璃空が笑った。
「心配しなくて大丈夫よ。カンナは、妖鬼を倒せるのよ？そこらの盗賊に何か負けないわよ」
片目をつぶり、愉しそうに歌うように璃空は言った。
「…そうよね。妖鬼を倒せるんだったら、大丈夫ね」
ホッと息を吐くタナサに璃空は優しい笑みを浮かべる。

「あっ、でも、家が分からないんじゃ」
「大丈夫。ほら、これ」
璃空がタナサに差し出したのは、透き通る薄い碧色の宝玉が２つあしらわれた銀の耳飾り。水を象ったその耳飾りは沈みゆく夕日を受けながらも、赤く染まらずに柔らかな光を時折放っていた。
「この石、１つの石を砕いた物なの。欠片同士引き付けあうようになってるから、私の居場所はすぐに判るはずよ」
「綺麗ね。私、こんなに綺麗なの初めて見たわ」
ほうっと感嘆のため息付いたタナサに璃空は嬉しそうに笑った。
「ありがとう。これ私が初めて作ったものなの。そう言ってもらえて嬉しいわ」
「璃空が作ったの？器用なのね」
「そう？師匠はもっとすごいの作ってたよ？」
「師匠？」

首を傾げるタナサに璃空は得意気に頷いた。
「私を育ててくれたんだけど、色んなことが得意な人。多分、天才て師匠みたいな人を言うんだと思うくらい」
「凄いんだね」
驚いたように言うタナサの言葉に璃空は顔をしかめた。
「どうしたの？」
「……師匠は、性格が最悪なのよ。見た目は良いし、と言うか極上なんだけど。何でも出来る割には面倒くさがりだから何もしないし。口は悪いし、人には恨まれまくってるし、金遣いは荒い。人が作ってあげたのには文句ばかりだし」
ふぅとため息をつく璃空から、少しひきった笑みを浮かべながら、タナサは視線をずらした。
「…大変なんだね」
ふっと投げ遣りな笑みを璃空は浮かべた。
「……慣れたわ」
「……そう」

「暗い話して、ごめんね。この話はここまで。この辺りも暗くなってきたし、早くタナサの家に行きましょう」
にっこりとさっきまでとはまるで違う明るい笑みを璃空は浮かべた。璃空の笑みにつられるようにタナサも笑って見せた。辺りを見回し、空の縁のほんの僅かだけが赤いのを見ると頷いた。
「そうね。あともう少しで着くわ」
「結構、遠いのなぁ」
「キャー」
唐突に聞こえてきた声にタナサはビクッと体を震わせ、思わず声をあげた。

師匠（後書き）

師匠の才と弟子の才。
優るのは？

安心感（前書き）

またまた間が開きました。少しも進まない話ですが、楽しんで下さる方がいらっしゃれば幸いです。

安心感

「カンナ、タナサが驚いてるでしょう。居なくなるのは構わないけど、そうやって人を驚かすのはやめなさいよね。悪趣味よ」
璃空は呆れたような表情を浮かべながら、タナサの後ろに立つカンナを睨んだ。
「そう、ポンポン言うなって。てか、居なくなるのは構わないって、冷たくないか、璃空」
苦笑しながら、自分を見るカンナに璃空は首を傾げる。
「そう？何処が？あなたが何処に居ようと大丈夫でしょう」
璃空の言葉にニッとカンナは嬉しそうに笑った。
「それって、俺を信頼してくれてる訳だな」
本当に嬉しそうにしているカンナに呆れたように一つため息をつくと、璃空は頷いた。
「そうとっても構わないわ。ところで、いい加減、タナサから離れたら？」
両肩に置かれたカンナの手の温もりにタナサは強張り、身動き一つ出来ないでいた。
「おっ、わりぃ。タナサは慣れてないのな」
璃空の言葉でタナサの様子に気付いたカンナは、慌てて両手を離した。
「大丈夫？タナサ。カンナも悪気があった訳じゃないのよ？ただ、馬鹿で無神経だから、あんな事をするだけで」
璃空はタナサを慰めながら、チクチクとカンナを責める。
事実なので、反論出来ないカンナは渋い顔でタナサから離れた所に立ち尽くすしかなかった。

「だ、大丈夫。急で驚いただけだから」
まだ頬を赤らめながらも、そう告げるタナサに璃空はギロッとカン

ナを睨む。
「タナサがそういうなら、いいわ。カンナ、次、同じことしたら、どうなるか分かってるわよね？」
タナサに向かって話し掛けたのとは異なる低い声でカンナの名を璃空は呼んだ。
「了解。肝に命じておきます」
両手を上げ、降参を示すカンナに満足気に璃空は頷いた。
「さて、タナサ、悪いけど急ぐわよ。もうかなり暗くなってるんだから。暗くなったら、何が出るか分からないんだしね」
ちろりとカンナを横目に見る。
「可愛い女の子を襲う銀色の変態とかね」
少し声を大きくし楽しそうな璃空の言葉にカンナは思わず顔をしかめる。
そんな二人の様子にタナサは知らず知らずのうちに笑みを浮かべた。
辺りはますます暗くなってくる。
タナサ一人であれば、恐怖に震えただろう。いや、誰と一緒であっても恐れで笑うどころではなかっただろう。
璃空とカンナ。
この二人と一緒だからこそ、タナサは暗い森の中でも笑えたし、恐怖に震えることもなかった。
（この二人と一緒なら、大丈夫。初めて会ったのにこんな風に思うのは変かな？妖鬼を倒すのを見たからかな？ううん、そうじゃない。この二人だから安心出来る、思えんだよ、きっと）
「さぁ、二人とも本当に急がないとご飯、食べ損ねるよ」
口論を初めそうな二人に声を掛けるとタナサは先に歩き出した。二人が、後を追いかけてくる足音にくすりとタナサはさらに笑みを深くした。

安心感（後書き）

暗き森にて、なおも続く安心感。落ち着いた二人の様子。
それが物語るのは？

帰宅（前書き）

約一年ぶりの更新。
目標、達成できず、すみません。

帰宅

辺りが完全に暗くなり、家々に灯りが灯された頃にようやく璃空達はタナサの住む村にたどり着いた。
家路を急ぐ村人に、挨拶を交わしながら進んで行く。
タナサの家は、村の中心部の広場近くにあった。
周りの家に比べ、一回り大きな煉瓦作りの家にタナサは璃空とカンナを案内した。
「ただいま」
「タナサ！何処に言ってたの！？」
タナサがドアを開けた途端、中から女性の声が響いた。
続いて恰幅のいい逞しそうな姿が現れた。
「こんなに遅くまで何処に行ってたの？道草してた訳じゃないんでしょうね？日が暮れるまでに帰りなさいとあれほど言ってあったでしょう！」
勢いよく喋る女性には、璃空とカンナの姿は目に入ってないようだ。
「か、母さん。待って。訳を話すから」
まだまだ続きそうな説教をタナサは、遮る。
それにようやく落ち着きを取り戻したタナサの母親―クナサが、ドアの陰にいた璃空達に気が付いた。
「タナサ、この方達は？」
いぶかしげな母親にタナサが慌てて二人を紹介する。
「璃空とカンナよ、母さん。森で妖鬼に襲われた時に二人に助けてもらったの」
「妖鬼に！怪我は、怪我はないの？どこか痛い所は？」
タナサの言葉にクナサは、心配そうに身体を見回し、手で撫でていく。
「大丈夫よ、母さん。それで二人に助けて貰ったから、家に泊めていいでしょう？」

怪我をしてないことを伝えると、ほっと安堵の溜め息をクナサは溢した。
少々心配性のクナサに自分が怪我したことを伝えるつもりは、タナサにはなかった。
それに実の所、タナサにもあの時璃空が何をしたのか分かっていなかった。
あの時どうやって治したのか何度か聞こうとはした。だが、何となく聞き辛く、躊躇っている内に聞けないまま家にたどり着いてしまったのだ。
「もちろんよ。タナサを助けて下さったんですもの。さぁさぁ、どうぞ二人とも中にお入り下さいなぁ」
クナサはにっこりとさっきまでとは一転して、友好的な笑顔を浮かべた。
「ありがとうございます。私は、璃空でこっちはカンナです」
礼儀正しく挨拶する璃空の様子にクナサは更に笑みを深くする。
「まぁまぁ、本当に娘を助けて下さってありがとうございます。もう本当にこの子ったら、どこか抜けた所が
「母さん、夕食の準備は？二人とも疲れてるんだから、早く中に入れてあげて」
タナサは恥ずかしそうに顔を赤らめながら、ぐいぐいとクナサの背中を押す。
「そうね。じゃ、私は夕食の用意をしておくから、タナサはお二人を案内しなさい。そうそう、お二人は同じ部屋で構わないわかしら？」
申し訳なさそうな表情を浮かべるクナサに璃空は笑顔で頷く。
「構いませんよ。迷惑をお掛けします」
もう一度頭を下げた璃空にクナサは好意的な笑みを浮かべると奥に戻っていった。
「ごめんなさい、母さんたら遠慮がないんだから」
ちょっと怒った表情をするタナサに璃空は首を振る。

「それだけ、心配してたのよ。それより、中に入ってもいい？」
「ごめんなさい。さぁ、入って。部屋を片付けなきゃね」

タナサの家の中は、今まで外に居た三人を暖かく迎え入れてくれた。
入り口で璃空はフードを脱いだ。
その下からは、茶色の動き易そうな服と大きな肩掛け鞄が現れた。
璃空が脱いだフードをさも当然という様にカンナが受け取る。
その動作だけで、タナサにはカンナが璃空を大切に思ってるのが分かった。
（いいなぁ、璃空は。カンナさんに大切にされてて。あれ、何でもこんなこと、思うんだろう？）
タナサは、そんな風に思う自分に少し戸惑いを覚えた。
それは、あの時妖鬼相手に優雅に戦うカンナを見た時芽生えた淡い思い。
その名をタナサが知る日は来るのだろうか？

部屋のあちらこちらに綺麗な刺繍が施された壁飾りや小物が飾られている。
それらを璃空が興味深げに見ているとタナサが嬉しそうに笑った。
目を輝かせて飾りを眺めている璃空は、子供らしくてタナサは改めて彼女が年下である事を意識した。
さっきまでは、璃空があまりにもしっかりしていて自分の方が年下の様な気がしていた。
（旅をしてると、皆あんな風にしっかりとしてくるのかしら？）
そんな二人とは対照的にカンナの興味は夕食にしかなかった。

置いてある物にも一切の興味を向けず、暇そうな表情を浮かべていた。
それに気が付いた璃空がこっそりとその足を踏む。
（何すんだよ！）
（少しはこういった物にも目を向けなさい！）
（俺は、腹が減ってるだ！そんなすぐ壊れる様な物、興味ないね）
（この乱暴者！少しは芸術性を養いなさい！）
小声で言い争う二人に気付かないのか、タナサはそれらは全てクナサの手作りだと説明し始めた。
「母さん、手先が本当に器用でこういう物を作って売ってるの。結構高く売れたりするのよ」
にこにこと笑いながら話すタナサの様子から、それを誇りに思ってるのがよく分かる。
「最も、母さんの血は私に受け継がれなかったみたいでね、私は本当に不器用なの」
ちょっと肩を竦めて見せるタナサに璃空は笑い掛ける。
「でも、タナサにはタナサしか出来ない事があるでしょ？そういえば、タナサの家は医師か薬師なの？」
首を傾げ尋ねる璃空に、タナサは驚いた様に目を見開く。
「家は、村に一軒しかない薬師よ。どうして、分かったの？」
（村に一軒。まぁ、この大きさだと妥当なとこね）
先程見た村の様子を思い出し内心頷きながら、タナサの問いに答える。
「昼間、タナサが摘んでたのは鎮痛効果のある薬草とか止血効果のある薬草とかだったでしょ？あれを使うのは、薬師か医師だけよ。それに、微かに薬草を磨り潰しような匂いがするしね」
何でもない事の様に璃空は答えているが、それは違う。
あのときタナサが摘んでたのは一見すると食用や毒草に似た物ばかりだった。
あれをほんの短時間見ただけで、薬草と見破れるのは同じ薬師か医

師位である。
（うん？薬草？そういえば、昼間採ってた薬草、何処にやったけ？）
慌てて両手を見てみるが勿論両手は空っぽだ。
急に両手や体の周りを見出したタナサに璃空とカンナは首を傾げた。
だが直ぐに璃空は何かに気付いたのか自分の肩掛け鞄を探る。
鞄から取り出したのは、あの時タナサが採っていた薬草が入った籠。
とても鞄に入る大きさではないが、焦っているタナサは気が付かない。
カンナにしても、不思議ではないのだろう何も口にしない。
「タナサ、探し物はこれ？」

にっこりと笑いながら璃空が差し出した籠に、タナサは飛びつく。
急いで中を確かめると、中にはタナサが摘んだ薬草が入っていた。
ほっと安堵のため息を付くと、タナサは璃空に頭を下げた。
「ありがとう、璃空。また、あそこに取りに行かなきゃ行けないかと思ってたの。でも、どこにこれ、持ってたの？」
「気にしないで。カンナが持ってたのよ、それ。フードの中にあったから、気付かなかったのよ」
にっこりとバレないように嘘をつく璃空をカンナは呆れたように見る。
だが、ここで突っ込めば痛い目に合うのを理解しているから、タナサの礼に頷くだけに留める。

「はい、ここが二人の部屋よ。狭いけどね」
そういってタナサが案内したのは、階段を上がってすぐの部屋。
確かにそう広いとは言えないが、ベッドが２つあり小さな棚が置か

れた清潔で居心地の良さそうな部屋だった。
璃空の目は、２つのベッドに掛けられたカバーに惹き付けられた。
けして派手ではないが幾つもの端切れが組み合わり、一枚の絵を描き出していた。
「すごい！とっても綺麗ね、このベッドカバー。これもタナサのお母さんが作られたものなの？」
まじまじとベッドカバーをみつめる、子供らしい璃空に笑みを溢しながらタナサは頷いた。
「ええ、母さんの作品よ。綺麗でしょう。自信作なんですって」

タナサと璃空が話してる横でカンナは黙々と璃空の分の荷物まで整理していた。
といっても旅の途中であるから荷物はそんなに多くない。
そもそも、璃空もカンナも元から小まめに整理をしているし、旅にも馴れているからすぐに終わってしまう。
手持ちぶさたになり、部屋を再度眺めていると小さく空腹を訴える物があった。
「はぁ～。腹減った」
それに答えるように小さく、あくまで璃空には聞こえない程度にカンナは呟いた。

まさかそれが聞こえた訳ではないだろうが、タイミング良くクナサの三人を呼ぶ声が下からした。

帰宅（後書き）

旅する者達は、一時の安らぎを味わう。
その先に待つ闘いを知らずに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7966a/

嵐舞姫

2010年10月20日23時15分発行